
ティアーズメイク

みつみず ゆうと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ティアーズ メイク

【Nコード】

N1053N

【作者名】

みつみず ゆうと

【あらすじ】

争いの絶えない大陸、シルファリア。

その中でも最南端の半島に位置する小国、トリスティア。

そこに彼らは確かに存在していた。

かつては『王国の槍』と呼ばれ、將軍職を代々継いできたが没落した貴族の跡取り

クリス＝ヴォルドレット。

トリスティアの王女、『涙をつくりしもの』
リリーナ「トリスティア。」

二人は戦場で出会い、互いに惹かれていく。

プロローグ

風が、吹いた。
決して爽やかとは言えない風が。

漂ってくるのは人が焼け、そして家屋が焼ける臭い。
少年　クリス・ヴォルドレットは鮮やかな金髪を風に靡かせながら、丘の上から燃え盛る故郷を眺めていた。

「そんな……」

少年は嘆く。

馬上から見下ろす故郷はもはやその原型を留めておらず、既に生き
ている者の気配すらしない。

同時に敵であるマルドリスの軍勢を、そして世界を呪った。
しかしそれはクリスに限ったことではない。
クリスの背後からも聞こえる嗚咽、嘆きの言葉。

そう、クリスたちは負けたのだ。

国王陛下より授けられ、ヴォルドレット家が代々守ってきた領地は
失われた。

クリスは背後で涙を流す男たちを見つめる。
誰一人として無傷なものはいない。

クリスの父が率いた軍勢は国境付近での野戦で敗北を喫した。
ヴォルドレット家の兵は屈強でありクリスの父もよく指揮して戦っ
たが、一領地と一国の軍である。明らかに兵数が違った。

奇襲気味の攻撃に対し、クリスの父は上手く守ったが最後は数の力で押し切られてしまったのだ。

クリスは敗北が確定的になった時、精兵を連れて戦場から逃がされていた。

「坊ちゃん、これからどうします?」

背後で一人じつと待機していた男が何かに耐えるような静かな声で話しかける。

クリスが声に目をやると黒き髭を顎に蓄え歴戦の勇士を思わせる顔が、苦痛に歪んでいる。

「母上たちが生きているかもしれない。城へ突入する」

クリスがそう言うと、男 ガレオスは表情を更に曇らせた。

「それは無理でしょう。もう既に城内には敵がなだれ込んでやす。こいつらに死ねと言うんですかい? それに私も怪我をしていますね。まともな戦働きは出来そうもありません」

クリスは背後を見渡す。

背後の男たちは不安げな表情でクリスを見つめる。

背後の兵たちも突入したいと思っっていることは間違いない。

しかしそれが成功するかと言われるればそうは思っていないであろう。

「ならばどうしろと! 母を、皆を見捨てるというのか!」

「坊ちゃんはまだ若い。ここは一度落ち延びて再起を図りましょう。」

辛いのは皆同じです」

「つく……」

クリスは再び城へと目をやって唇を噛む。

既にヴォルドレットの軍勢の多くは父と共に失われ、もはや援軍も望めない。

情報では隣の領地の境にも兵が配置されているとの事だ。

金髪の少年は背後の兵たちに向き直って号令を発した。

「王都へと……王都へと向かう。そして王に援軍を乞うた後、ここへ戻ってこよう！ 必ず我らの領地を取り返す！ 何年かかってもだ！」

そう言っただけ少年は馬首を翻した。

城に背を向け、騎馬隊は草を巻き上げて走り出す。

領境までは馬を走らせて数時間だ。

境に着いたころには既に空は茜色に染まっていた。

「まったく。一領地を落とすのにどれだけの兵力を動員してやがるんだ」

クリスは領境に野営する軍を見ながら言う。

あちこちから食事の煙が上がり、休息をとっている。

戦闘員の規模は千人ほどであろうか。

領境に詰めている人数はそれほどではないが、クリスの父を破った

人数、城を落とした人数を鑑みるに、隣国マルドリスは動かせるほど全軍を動かしていた。

「まあ、この程度でしたら怪我してるとはいえ、晩飯前の運動にはちょうどいいくらいでしょう」

顎鬚の男、ガレオスが言う。

「ガレオス副隊長に運動させちゃいけない。なんせ食費がかさみますからな」

そして兵の誰かが言う。

既に先ほどまでの悲壮感はない。

クリスもつられてフツと笑い、槍を高く掲げる。

「我らは世にその名を轟かせしヴォルドレット隊！ 数は三百なれど万の兵に値す！ 我らのうちに燻ぶる怒りは敵を焼き尽くし、いつの日かこの地に帰りし時まで消えぬ！」

軽口は止み、全ての兵がクリスを見つめる。

その瞳は爛々と輝き、その戦意の高さをうかがわせる。

「先とは違い、我らはここを突破するだけでよい。なれば何を恐れることがあるのか！ 行こう、ヴォルドレットの兵共よ！ 我に続けええええ！」

クリスは駆け出す。

敵の野営地へと向けて。

その背後に続くは殺戮の濁流。全てを飲み込み、食い散らかす血に飢えた野獣だった。口々に雄たけびを上げ、もはや言葉を発している者は一人として存在しない。

ただその怒り、そして飢えに任せて突撃をするだけであつた。

「おおおおお！」

クリスも例外ではない。無意識のうちに口からは咆哮。

大地を揺るがすような馬蹄の響きに気づいたマルドリス軍も、急いで迎撃体勢を整えるが、ヴォルドレット隊のあまりの速さにパニックになる者さえ現れた。他人の槍、他人の兜を身につけるもの。慌てて逃げようとする者。まさか突如として敵が突っ込んでくるとは思っていなかったマルドリス軍は、戦う前から負けていた。

「止まるな！ 隣で友が倒れても、俺が馬から落ちても立ち止まらずに駆け抜けよ！ トリスティアのお家芸、騎馬突撃を見せてやれ！」

クリスは槍で立ちふさがる敵を蹴散らしながら叫ぶ。

敵は明らかに雑兵だ。兵たちには統率もなく、各々で向かってくる。しかしそんなもので騎馬を止められるはずが無かつた。

クリス自身も先頭で槍を振るい、立ちふさがる敵をなぎ倒す。

ある者は首に槍を突き立てられ、ある者は薄い胴当てごと腹を破られ。

元々広く薄く布陣していたマルドリス軍の防備はすぐに打ち破られ、クリスたちは突破に成功する。その足跡に血の川を残して。残され

たマルドリス軍は走り去るその背中を安堵のため息と共に見送るし
かなかつた。

ここにクリス・ヴォルドレットの物語は動き出したのである。

涙を振り撒きし者 1

怒号が草原を埋め尽くしていた。

あらゆる所で血飛沫が舞い、草や大地を赤く染め上げていく。

戦場を覆い尽くすのは、血と汗、そして吐瀉物による臭気。

そんな戦場を見下ろす小高い丘の上には、鮮やかな金髪の青年が立っていた。

長身がっしりとした体、しかしそれは鈍重な印象を与えるものではなく、戦場に立つ者としてはむしろ痩せ型の方であろう。そして彫刻のように整った精悍な顔は、明らかに血生臭い戦場には不釣り合いの物と言える。

彼はクリス・ヴォルドレット。かつて大陸南方に名を轟かせた『トリストティアの槍』、ヴォルドレット家の生き残りである。

「クリス、我らはまだ動けぬのか」

その隣には銀髪の少女。年はクリスより少し下くらいだろうか。

全てを射抜く矢のような大きな蒼い瞳。無骨な甲冑は白磁のような肌に不釣り合いで、美しいドレスこそが彼女の身につけるべきものだといえよう。

「まだだ。まだ命令は来ていない」

クリスは冷静に、グラスを弾いたような凜とした声に答える。

戦線は一時間前と比べて明らかに後退しており、戦いの趨勢が決したことは素人が見ても明らかだ。

「でも、もうダメだな。こりゃ負ける」

クリスが銀髪の少女へと言う。

「ふん、ダメとはなんだ。我らが参戦すればまだ何とか持ち直せる」

少女がその言葉を一蹴し、戦場へとその美しい顔を向けた。

「いくら旧ヴォルドレット隊を主体にしても、俺らは五百程度。その程度じゃ戦は動かせん」

クリスたちが不毛なやり取りをしているうちにも敗走する部隊は増え続けており、立て直せるとは到底思えない。

両軍が衝突した当初、トリスティア軍の兵数が総数三千に対し、マルドリス軍は六千。

マルドリスには徴兵した兵が多く、トリスティアが全て職業軍人だということも考慮しても、明らかに野戦で覆せる兵数ではない。

「しかし、我らが敵の司令官を突けば何とかなるのではないか？」

「お前はいつもそれだな。リリーナ、お前はこの国の王女だつて事を忘れてんのか？ お前をそんな危ない目に合わせられるわけねえだろ。この猪姫が」

「むっ。失礼な。そなたとて同じようなものではないか」

リリーナは白い頬をぷーっと膨らませる。

そんな子供っぽい表情を見せる少女はトリスティア王国の王位継承

権第一位の王女である。この大陸の通常の国家では、男子にのみ王位継承権が存在するというのが普通である。しかし、かつて女帝が建国し、一時の繁栄を築いたこの国では女子も王位継承権をもつことが許されている。

「俺は部隊の特性を生かしてるだけだ。お前の考えなしとは違うんだよ」

「じゃあ、本音を言おう」

そう言つてリリーナは真剣な顔つきでクリスを見つめる。

この少女が大真面目で言うことはろくでもないことをクリスは知っていたため、ため息を一つつく。

「暇なのだ」

返ってきた答えはほぼ予想通り。

クリスの正直な気持ちで言うと、何故自分の部隊の長がリリーナなのか国王に小一時間程度問い詰めたい気持ちだった。

「暇じゃねえよ。そりゃお前は特に何もしてないからいいけどな」

「む、失礼な。私とて何もしていないわけではない」

彼女は再びクリスをまっすぐ見据えると、胸を張って答える。

「既にイメージはできている」

「一応聞いてやる。何のだ？」

「敵中に飛び込んだ後のだ」

クリスはリリーナから視線を逸らすと、戦場へと視線を戻す。既に各所で騎士たちは捕らえられているようだ。

敵としても騎士を殺すメリットは特に無い。

騎士に関しては捕らえて身代金を要求した方が良いのだ。

だからといって戦死者が少ないわけでもない。

このたびの戦いも多くの騎士が命を散らしているだろう。

クリスがそんなことを考えていると、横から異常なまでの視線を感じた。

「聞かぬのか？」

チラッと横目でリリーナを見る。

「のう、聞かぬのか？」

御伽噺の妖精のように整った顔をクリスに向けて、リリーナは期待に瞳を輝かせていた。

「言ってみろ」

「うむ。敵をこうガツーンと蹴散らすのじゃ！」

身振り手振りを加えて、少女は誇らしげに言う。まるで戦場ではなく、城内の庭園で遊んでいるかのような口ぶりで言う彼女にクリスは苦笑した。

この少女はイマイチ緊張感に欠ける。ガツチガチに体を硬くするよりは遥かにマシとも言えるが。

とはいえ、この少女はいざ戦闘になると人が変わる。個人の槍働きも普通ではないが、特筆すべきはその統率力なのである。

クリスがそんな彼女のことを考えていると、部隊の背後より近づくと一騎の騎士が見えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1053n/>

ティアーズ メイク

2011年10月7日17時59分発行